

「どうです／でした (か)」型質問をめぐる相互行為の諸相

—『日本語話し言葉コーパス』の用例から—

増田 将伸

甲子園大学

masuda@koshien.ac.jp

1. はじめに

質問という発話行為は、Searle が設定した適切性条件 (Searle 1969) を参照するまでもなく、相手に対して何らかの情報を要求するものである。したがって、質問という発話行為は、明らかに相手の存在を前提として成り立つ。

このことを考えると、質問について考察する際には、質問者と相手のやり取りの中で質問のふるまいを分析することが望ましいと言えよう。本稿では、このような問題意識に基づいて、実際の対話の中の用例を分析対象とする。また、分析に際しては、対話の中での質問のふるまいを精確に捉えるために、会話分析 (conversation analysis) の方法論に依拠する¹。これによって、発話間の間隙 (pause, gap, silence) や、質問に先行する連鎖でのやり取りの内容など、単文の言語的情報には含まれない手がかりをも分析に利用することが可能になり、分析がより精確なものになると考えられる。

本稿では、分析対象を「どうです／でした (か)」型質問 (第3節で詳述) に絞って分析を行う。「どう」を用いた質問を分析対象としたねらいは二つある。一つは、WH 質問の中でこれまでほとんど研究がなされていない「どう」という疑問詞を用いた質問を分析することで、質問の研究に新たな知見 (あるいは、何らかの新たな視座) をもたらしたいということである。もう一つは、指す内容があまり限定的でない語である「どう」を用いた質問は、その解釈が文脈に依存する側面が大きいと考えられるので、「どう」を用いた質問 - 応答連鎖を分析することで、質問 - 応答をめぐる相互行為が鮮明に示されるのではないかと考えてのことである。

分析を通じて、本稿では「どうです／でした (か)」型質問が単独で使われていることはあまりなく、Yes/No 質問などの要素をその前か後ろに伴うことが多いということ、そしてそれらの付加要素が、質問内容があいまいになりやすい「どうです／でした (か)」型質問に対する応答内容を限定しているということを示す。また、第5節では、そのような応答内容の限定がうまく機能していない例をも取り上げ、「どうです／でした (か)」型質問をめぐる相互行為の様々な様相を提示する。

2. 先行研究

「どう」に関する先行研究は少ない。益岡・田窪（1992）では、「ど」系列の指示詞について述べている部分に「どう」についての言及があり、以下のように述べられている。

指示詞「ど」系列には「どれ、どこ、どちら、どの、どんな、どう、どうして」等があり、疑問表現で用いられる。これらの語を「疑問語」と呼ぶ。（益岡・田窪 1992: 39）

しかし、「どう」自体の用いられ方についてこれ以上の言及はない。

飛田・浅田（1994）では、「どう」がひとつの項目として取り上げられている。本稿の主眼である疑問文としての用法についての記述のみを抜き出して以下に挙げる。

- (1) 不定の状態や方法・手段を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語または述語にかかる修飾語として用いられる。疑問文として用いられた場合には、状態や方法・手段についての疑問になる。
- (2) 疑問文の形をとり、相手に勧める意味を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語として用いられるが、③④のように叙述部分を省略したり、単独で用いたりすることも多い²。（飛田・浅田 1994: 316-317）

また、奥津（1996）では、「どう」は疑問と不定を表す様態の不定副詞として捉えられている³。以上をまとめると、「どう」は、何かの様態が不定である様を表しており、その不定の状態について相手に問いかけるときに疑問詞として用いられると言えるだろう。

なお、本稿での分析対象とする型の1つである「どうですか」については、川口（1989）に以下のような記述がある。

「…ハドウデスカ」はある人、モノゴトについて相手の意見を問う質問文で用いられ how about…、what do you think of…、qu'est-ce vous pensez de…などに当る用法がある。

（川口 1989: 18-19）

川口（1989）は「相手の意見を問う」と記しているが、飛田・浅田（1994: 317）でも「状態の疑問の形を借りて、相手の意向をたずね」る用法が指摘されている。後の議論でこの用法にもふれるので、様態の不定副詞としての用法とともに留意されたい。

3. 分析対象

本稿で分析に用いたのは、『日本語話し言葉コーパス』（以下 CSJ）の対話例である。CSJ は、日本語の話し言葉研究用の大規模データベースであり、講演を中心とする独話音声と、インタビュー、課題指向対話、自由対話から成る対話音声、および朗読音声から構成されている。本稿では、対話音声の中の「模擬講演インタビュー」16 例と、同じ二話者による

「自由対話」15例を分析に用いた⁴。

「模擬講演インタビュー」は、その録音に先立ってインタビュイーが行った、自分の経験などについてのスピーチ（「模擬講演」）の内容についてインタビュアーが質問することで展開される対話である。「自由対話」は、話題の制約なしにインタビュアーとインタビュイーが自由に会話をする。しかし、インタビュアーとインタビュイーはほとんど初対面に近い状況であり、共通の話題が少ないので、「自由対話」においても「模擬講演」の内容についてインタビュアーが質問することで対話が展開されることが多い。したがって、対話が始まると「模擬講演インタビュー」と「自由対話」にはほとんど違いが感じられない。また、どちらの種類の対話でも、インタビュアーとインタビュイーの二者による会話が約10分間行われている。インタビュアーは2人いて、いずれも女性である⁵。インタビュイーは8例が女性、8例（自由対話は7例）が男性である。

本稿では分析対象を「どうです／でした（か）」型質問に絞った。これは、具体的には「どうですか」「どうでした（か）」、及び「どうなの」「どうだった」「いかがでしたか」という形のものである。これらの「どうです／でした（か）」型質問は、分析対象とした対話例の中に21例見られた⁶。「どうする／なるんですか」「どう思いますか」など、広く「どう＋動詞」型のもを扱えば、例数が増えて「どう」型質問の多様なふるまいを確認しやすいとは考えられるのだが、これまでほとんど研究がなされていない「どう」を用いた質問を分析する手始めとして、議論が散漫になるのを避けるために、本稿ではまず単純な形式のものに対象を絞って分析を行った。

4. 分析

分析の結果、「どうです／でした（か）」型質問が単独で使われていることはあまりなく、全21例中の15例で「どうです／でした（か）」型質問の前か後ろに何らかの要素が付加されているということが確認できた。以下では、そのうち最も多かった、「どうです／でした（か）」型質問の後にYes/No質問が続けて発せられるタイプについて4.1節で論じ、4.2節で、Yes/No質問以外の要素が付加されている「どうです／でした（か）」型質問について論じる。

4.1. Yes/No 質問後置型

何らかの要素を付加して用いられている「どうです／でした（か）」型質問で最も多かったのは、「どうです／でした（か）」型質問の後にYes/No質問が続けて発せられる（1）（2）のような例で、例数は6例だった⁷。

(1)⁸

[D03F0008_0001-0005]

01 L: じゃあまた 10 分間(.)よろし[くお願いします]

02 A: [お願いします((「す」は s 子音だけで伸びている))=

03→L: =.hh 今日はどうでした[か_i]疲れまし° (た)°

04 A: [hh]

05 A: (0.2).h(.)↑そんなに疲れなかったですね

(2)

[D03M0037_0001-0014]

01 b: よろしくお願いま[す]

02 L: [よ]ろしくお願います.hhh° お疲[れ様でしたh°]

03 b: [今日はどう]もありが

04 とうご[ざいました]

05 L: [>いえこち]らこ(h)そ(h)あ(h)り(h)が(h)と(h)う(h)ご(h)ざ(h)い(h)ま(h)し(h)

06→ たく.hh どうでした_i[(.)]つ[かれま° し(た)°]

07 b: [hh] [ん : ま]あ.hhh そうですね: 疲れるっていう

08 ことはないんですけど[ね, (0.2)あの: (.)][終わ]つてみればね, あっという間だから=

09 L: [ふ: ん き[ん-]

10 L: =.hhh

11 (.)

12 b: ま[あ: そ]んなに(0.2)大変ではなかったです[けど]

13 L: [hhh] [ん:]緊張しませんでしたか?((「せ」

14 の前が詰まっている))

(1)(2)の連鎖の構造は、これらがいずれも対話の冒頭部分であるということもあり、かなり類似している。「どうでした(か)」という質問を含むターンについて見ていくと、(1)

(2) いずれの例でも、質問が半上昇調のイントネーション(_i)でなされ、それに続いて応答者の吸気音(hh)が確認できる。すなわち、応答者は「どうでした(か)」という質問にすぐ答えようとしていると考えられる。

しかし、それにもかかわらず、(1)でも(2)でも応答者は吸気の後に応答を続けない。これは少なからず不自然である。このことに対しては、何らかの理由で応答の遅延が生じていると解釈する必要があるように思われる。これについて考えるために、もう1つ例を参照されたい。

(3)

[D01F0055_0226-0240]

((Cがフランスに行ったときにケーキとワインがおいしかったかどうかを質問した後に))

01→L: .hh(.)ご飯<トータル的>にはどうでしたフランス、[合う:]

02 C: [.hh]hh あっだい好きで03 すただ[: (0.2) こ]う: 庶↑民的な:(.) [(0.2) りょ]う理:(.) ビストロ(.)>て=

04 L: [° う: : ん°] [う° : : ん°]

05 C: =言うの<が[な ん か (0.3) i- 安]くて:]>だいたい<一食千円ぐらいである=

06 L: [うんうんうんうんうん]

07 C: =んですけど[も:]そ↑こはあん: まり:(0.4)う: : ん(0.2)そんなに:(0.4)=

08 L: [う: ん]

09 C: =u=((喉の鳴る音))

10 L: =おいしくな: い=

11 C: =そうですね

(3)では、1行目の「どうでしたフランス、」の直後に応答者の吸気音を確認できる。ここでも、応答者が「どうでした」の後の最初の移行適格場⁹で質問に答えようとしている点は(1)(2)と共通している。そして、(3)で特徴的なのは、2行目の吸気音の音調である。上記トランスクリプト上では吸気音が長いということが確認できるのみだが、この吸気音は、何かを考えている途中であるような調子で発せられている。つまり、ここでCは、質問の後の最初の移行適格場で質問に答える姿勢は見せているが、直ちに応答せず、吸気音を引き延ばしながら応答内容を考えているのである。

そして、吸気音の後を見ると、「合う:」というYes/No質問(1行目)を聞いてから「あっ」という感動詞が発話され、それに続いて「だい好きです」という応答がなされている。すなわち、(3)では「どうです/でした(か)」型質問の直後には応答者が応答内容を決まてきていないが、Yes/No質問が続けられることで応答内容が限定されているのである。

この分析は、(1)(2)で「どうです/でした(か)」型質問の後に応答者がすぐ応答しようとしているにもかかわらず、吸気の後に応答が続けられていないことも整合的である。すなわち、応答者が「どうです/でした(か)」のみから応答すべき内容を限定するのは難しいということである。これは、「どう」という語の指し得る範囲が非常に広いためであるとえられる。したがって、Yes/No質問が「どうです/でした(か)」型質問の後に続けられることで、「どう」の指している内容が明らかになり、Yes/No質問に即した内容の応答がなされるのである。上記の各例で質問者Lが「どうです/でした(か)」型質問の後でほとんど間を置かずに(すなわち、相手の応答を待たずに)Yes/No質問を続けているのも、「どうです/でした(か)」型質問だけでは応答者が応答すべき内容を限定しにくいということに指向している¹⁰表れであり、相手から応答を引き出すために用いている手段であると捉えられる。

本節では、Yes/No 質問が続けて発せられる「どうです／でした (か)」型質問について分析を行い、Yes/No 質問を「どうです／でした (か)」型質問に続けることで「どうです／でした (か)」型質問に対する応答内容が限定できるようになっているということを指摘した¹¹。次節では、Yes/No 質問以外の要素が「どうです／でした (か)」型質問に付加されている例について論じる。

4.2. その他の要素付加型

本節では、Yes/No 質問以外の要素が「どうです／でした (か)」型質問に付加されている例について論じる。分析の結果、これらの要素も Yes/No 質問同様に「どうです／でした (か)」型質問に対する応答内容の限定を可能にしていることが確認できた。まず、質問者が自らの想定を付加してそれに即した内容の応答を求めている例である (4) を参照されたい。

(4)

[D03M0007_0001-0023]

01→L: じゃ: また 10 分間[(.)よろ]しくお願[いしま]す: .hh あの: : : 今日は(.)=

02 d: [はい] [はい]

03→L: =[(0.2)]どう[で し た]か(.)n huh[.h(.)]喋るのってすごく: : =

04 d: [((唾を飲み込む音))] [((小さな咳))] [.hh]

05→L: =体力要と思うんですが: [ま.hh]

06 d: [うんま] た(h)い力はある(h)んまり要ら[な い]

07 L: [要(h)ら(h)]

08 な(h)い(h)で[(h)す(h)か(h): [hya hya hya].h[h h.hh]

09 d: [うん 使わない[んだけれども] [う ん]

10 (.)

11 d: .hh まあんまり上手に喋れないんで

12 (0.2)

13 L: いや(h)そんなことないです: =

14 d: =ちょっと(.)出だし、緊張があ[ったかな]っ° という感じがしたんだ[けれども(ね)°]

15 L: [あ.hhh] [° やっぱりそ]

16 うで[すか:°]

17 d: [う: ん]

18 (.)

19 L: ° う: ん° でも↑慣れてらっしゃいますよ[ね や は り]

20 d: [>そう<です]か eha[haha

21 L: [° ええ:°]

28 E:=[って(h)hh ここ-もつと心を広く持ってやらなきゃっ]て]

- 29 L : =[a a hhhhh((無声笑い)).....]じ]やよかったかも
 30 し[れない(けど)
 31 E : [.hh はい hhhhhhh((笑い声))

(5) も、「いつもは(.)聞いてそれを(0.3)分析してる方だと思うんですが」(1、4、6行目)と質問者 L の想定が付加されている点は(4)と同じである。この想定が付加によって、L は E に「普段対話の分析をしている者」としての立場に即した内容の応答を求めていると言える。しかし(5)では、「今日実際やって」(8行目)という語句がさらに付加されている。E が対話への参与を「今日実際やっ」たのは客観的に確認できる事実であるので、これは質問者 L の考えが反映された想定とは言いがたい。しかし L は、この事実を言語化して「どうでした」の前に付加することで、参与者としての立場ないしは経験に即した E の応答を求めていると考えられる。すなわち、(5)において質問者 L は2種類の付加要素を用いて応答内容の限定を試みているのである¹³。

応答者 E は、この2種類の付加要素のどちらにも対応する形で応答している。応答の前半(9、10、12行目)で「今日実際やって」(8行目)に対応する、E が実際に感じた素朴な感想をまず述べ、その後16行目以降から、1、4、6行目で示された L の想定に対応する、「普段対話の分析をしている者」としての立場に即した内容の応答をしている。したがって、2種類の要素が付加されている(5)でも、「どうです／でした(か)」型質問に何らかの要素を付加することによって応答内容の限定が試みられ、参与者がそれに指向して相互行為を行っているということが示された。

本節では、「どうです／でした(か)」型質問に Yes/No 質問以外の要素が付加されている例について分析し、2種類の付加要素が用いられている例の分析をも交えながら、Yes/No 質問以外の要素が付加されている例でも「どうです／でした(か)」型質問に対する応答内容の限定が行われているということを示した。

4.3. 付加要素なし型

本節では、付加要素なしで「どうです／でした(か)」型質問が用いられている例について分析する。このタイプは6例確認でき、そのうち5例が連鎖の途中で用いられている質問であった。

以上、第4節では、用例の記述・分析を通じて「どうです／でした（か）」型質問の対話中での用いられ方に様々なタイプがあることを示した。また、指し得る範囲が非常に広い語である「どう」という語を含むために質問内容があいまいになりやすい「どうです／でした（か）」型質問について、それぞれのタイプにおいて付加要素や先行する連鎖によって応答内容が限定されているということをも示した。

5. 考察—今後の相互行為研究に向けて—

第4節では、「どうです／でした（か）」型質問の用例の記述・分析を通じて、質問内容があいまいになりやすい「どうです／でした（か）」型質問を用いる際には、応答内容を限定するような方法が用いられているということを示した。これは、従来の文法書には記されていないことであり、実際の対話の中の用例の仔細な分析を通じてはじめて得られた知見であると言えるだろう。

しかし、対話参加者の実際の相互行為は複雑であり、応答内容を限定するような方法が用いられているにもかかわらず質問者が望む内容の応答がなされていない例も見られる。本節ではそれらの例について、幾分推測的なものではあるが考察を展開しながら、今後の相互行為研究に向けた課題を展望していきたい。

まず、応答内容を限定する方法が相互行為においてうまく機能していない例として（7）（8）を参照されたい。

（7）

[D03F0034: 0004-0013]

01→L: .hhh 今日はどうでした疲れくまし>=

02 F: =ね: あんまり: あの: (0.6)あの模擬講演の方[(.)]はやっ)たことがな[かったの=

03 L: [う: : ん] [ああああ=

04 F: =で: [う : : ん].hh 何か(.)やっぱ違いますね[あの学会と]かそ(h)[の発表=

05 L: =[ああああああ:] [う : : ん] [h ああ=

06 F: =とは>やっぱり違うく

07 L: =ああああああああ

（8）

[D03M0017_0001-0040]

01 I: お願いし[ます]

02 g: [お]願いしま: す

03→I: .hhh え: っと: hh 今日はたくさんはな(h)し(h)て(h)い(h)た(h)だきま[したが]

04 g: [あ h](.)は

05 (h)い.h=

06→I: =(hh)いかが[でしたか(h)ha]

07 g: [.hhh]え: と: hh(0.3).hh 久しぶりに hh(.)(.hh)国研に来て

08 hh(.).hh あ: >そういうくはなす内容とは関係ないですね

09 I: あいいで[すいいです hh[.hh]

10 g: [え: っと: [話]したのは[(.)][hhhhhh え: : : hhh(0.3)うんまあ=

11 I: [h[h

12 g: =面白かったです s(h)[: よ(h)く(h)わ (か) (h)んな] (h) h h h h h h h h]((笑い声))

- 13 I: [面白かったですか₂].hh 割とそういうと]きには
 14 緊張はしない(0.3)タイプですか₂
 15 g: (.) いやいや緊張しますよ[(.) もう]: 今も非常に緊張[して]
 16 I: [ふ: ん] [あ]そうなんです
 17⇒ [か₂(.)]そうは見えないんですけど: .h[hh]え: っとじゃあ(0.4)>久しぶり=
 18 g: [へえ:] [hhh]
 19⇒I: =に<国研に来てどうでしたか
 20 g: (.) え: だいぶ(.)人が入れ替わっていて[(.)]う: : ん hh(.) まあ(0.3)部屋も白く=
 21 I: [はい]
 22 g: =なったし=
 23 I: =ああそうです[ね大きな変化で] す ね]
 24 g: [黒い 部屋 が](う/お)ん:]:
 25 (.)
 26 I: .h[h]
 27 g: [h]h いろいろと h
 28 (.)
 29 I: 以前: は: 国研ではどんな仕事をしてらしたんですか?

(7)の1行目では、「今日はどうでした」という「どうです／でした(か)」型質問の後に「疲れ<まし>」という語句が続いている。「疲れ<まし>」は「疲れましたか」を言いさしたものだと考えられるので、(7)は4.1.で論じた Yes/No 質問後置型の「どうです／でした(か)」型質問にあたる。しかし、(7)では応答者Fは「疲れましたか」という Yes/No 質問を取り上げず、CSJ 録音のための対話と学会などでの発表との間で違いを感じたということについて応答している。

(8)では、6行目の「いかがでしたか」という質問の直前に、3行目で「今日はたくさんは(h)な(h)し(h)て(h)い(h)た(h)だきましたが」という前置きがなされていることによって、gには「今日」「たくさんはなし」た者としての応答が求められていることがうかがえる。しかしgは、7行目で「久しぶりに hh(.)(.hh)国研に来て」と、話し手としての立場とは直接関係しない内容の応答を始める。

もちろん、「国研に来」たのはCSJ録音のために話すためであるので、このgの応答内容はCSJ録音の話し手としての立場に全く関係しないとは言えず、質問者Iによる応答内容の限定に従っているとも捉えうる。しかし、(8)において重要であるのは、その後(8行目)でgが「あ:>そういうくはなす内容とは関係ないですね」と述べて、10行目で「え: っと: 話したのは」と応答を違う形でやり直そうと試みていることである。すなわち、gは最初(7行目)の自らの応答を適切でないものと判断し、より適切な形で応答しようとしているのである。このことから(8)は、やはり質問者による応答内容の限定が応答の際にうまく機能しなかった例として捉えられる¹⁵。

これらの例から、質問者が応答内容を限定する方法を用いていても応答者が質問者の望む内容の応答をするとは限らないということが確認できた。但しその理由は、応答内容の限定が応答者に伝わっていないからということだけでは必ずしもないように思われる。本稿では、応答者の意思という観点を導入することで、(7)(8)において応答内容の限定がうまく機能していない理由の説明を試みたい。

(7)の2行目で応答者Fは、少なからず勢い込んで応答している。「勢い込んで」というのは、語気が強いということではない。しかし、Lの質問を途中で遮って応答を開始し、また応答ターンの冒頭に「ね:」という呼びかけを用いて注意を引きつけているFの応答の仕方は、「勢い込んで」と言い表すことが出来るように思われる。したがって、「CSJ録音のための対話と学会などでの発表とは違う」というFの応答内容は、質問がいかなるものかにかかわらずFがLに話したかったことだったのだという推測が成り立つ。(8)についても、質問者Iによる応答内容の限定に従わない形の応答をgがしたのは、gが初めはその内容を話そうと思っていたからだというように考えられうる。

もっとも、この説は論拠が弱いので現段階では推測の域を出ない。しかし、応答者は完全に受動的に対話に参加しているわけではないので、質問者が応答者に応答してほしい内容があるのと同様、応答者にも質問者に伝えたい内容があるはずだと考えるのは自然である。したがって、応答者の意思という、従来の発信者重視のコミュニケーション研究では見落とされがちだった観点も意義を持ちうると考えられるので、より多くの例の検討を通じて応答者の意思にも注目していきたい。

また、(7)(8)において、質問者による応答内容の限定にかかわらず応答者が応答している内容が、いずれもCSJ録音のための対話に臨んで((8)では、録音の舞台となる国語研究所に来て)感じたことであるということも注目に値する。これはすなわち、応答内容の限定にかかわらず、「どうです/でした(か)」型質問に対する応答として応答者が感じた感想が述べられうるということであり、「…ハドウデスカ」によって相手の意見が問われるという川口(1989)や飛田・浅田(1994)の記述と整合的である。

しかし、「どうです/でした(か)」は字句上は不定ないしは疑問を表す語句にすぎないので、「どうです/でした(か)」が応答者の意見や感想を問うという役割を果たすのなら、それがどのような要素の働きによるもので、どのような状況で行われるのかということについても用例分析を通じて検討していかなければならない。このように、用例分析を通じて既存の文献の記述を問い直すということも今後の相互行為研究の課題となるであろう。

6. まとめ

本稿では、会話分析の手法で対話中の「どうです/でした(か)」型質問を分析し、「どうです/でした(か)」型質問の用いられ方に様々なタイプがあることを示した。また、「どうです/でした(か)」型質問が単独で用いられていることはあまりなく、Yes/No質問などの要素をその前か後ろに伴うことが多いということ、そしてそれらの付加要素が、質問内

容があいまいになりやすい「どうです／でした(か)」型質問に対する応答内容を限定しているということをも示した。これは、従来の文法書には記されていない、実際の対話の中の用例の仔細な分析を通じてはじめて得られた知見である。

今後の課題としては、第5節で示したような新しい観点に注意しながら、より多くの用例にあたって分析を精緻化する必要がある。また、「どうする」「どう思う」など「どう」を用いた他の用例や、他の疑問詞を用いた質問との比較を通じてさらに議論を深めたい。

本稿で用いられているアノテーション記号一覧

= 途切れずに行われるターン交替、または複数行にまたがって記される同一話者のターン

: 長音(多いほど長いことを表す)

[同時発話の開始点

] 同時発話の終了点

(秒数) 沈黙の秒数

(.) 0.2秒未満の沈黙

h 呼気音(多いほど長いことを表す)

.h 吸気音(多いほど長いことを表す)

(h) 笑い声、または帯気音

↑ 語句 上昇音調を伴う語句

> 語句< 速く発音された語句

< 語句> 遅く発音された語句

語句 強勢の置かれた語句

° 語句° 小さな声で発音された語句

語句- 不完全なまま途切れている語句 (語句) 聞き取りが確定できない語句

語句: 強調を伴いながら末尾が少し上がっている語句

, 発話の継続を示す音調

, 発話が間隙なしに区切られている箇所

? 上昇音調

? 上昇音調(?より上昇幅が小さい)

((語句)) 筆者による注記

→, ⇒ 分析の対象となる行

参考文献

- 川口順二 1989. 「「ドウシテ?」について—対照的観点から—」『日本語学』8(9): 15-21.
- 串田秀也 2006. 「会話分析の方法と論理: 談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」伝康晴・田中ゆかり(編)『講座社会言語科学6 方法』188-206. 東京: ひつじ書房.
- 益岡隆志・田窪行則 1992. 『基礎日本語文法—改訂版—』東京: くろしお出版.
- 増田将伸・森本郁代 2006. 「「どう」系列の質問—応答連鎖における応答内容限定のプロセス—」『日本語話し言葉コーパス』の対話例の分析から—9-14. 人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-A503.
- 奥津敬一郎 (1996). 『拾遺 日本文法論』東京: ひつじ書房.
- 尾上圭介 1983. 「不定語の語性と用法」渡辺実(編)『副用語の研究』東京: 明治書院.
- 阪倉篤義 1960. 「文法史について」『国語と国文学』昭和35年10月号.
- Searle, John R. 1969. *Speech acts: an essay in the philosophy of language*. Cambridge University Press.

飛田良文・浅田秀子 1994.『現代副詞用法辞典』東京堂出版.

使用コーパス

国立国語研究所・情報通信研究機構.『日本語話し言葉コーパス』.

- ¹ 会話分析の方法論については、串田（2006）を参照されたい。
- ² ③④はそれぞれ、「帰りにお茶でもどう？」「どう？ 今度の日曜日、ドライブしない？」という例文である。（太字は原文ママ）
- ³ このように疑問と不定を連続的に捉える考え方は、阪倉（1960）に端を発すると考えられる。この捉え方は尾上（1983）とも共通している。
- ⁴ 同じ話者によって二種類の対話が録音されているにもかかわらず「自由対話」の方が1例数が少ないのは、あまりにも不自然な形式（インタビュイーがメモに書いてきた話題リストをインタビュアーが読み上げ、それぞれについて順に話を聞いていく）で行われた自由対話1例を分析対象から除外したことによる。
- ⁵ 本稿中の対話例ではLとIとして示されている。Iは20代、Lは30代である。
- ⁶ 内訳は、「どうでした」8例、「どうでしたか」7例、「どうですか」3例、「どうなの」「どうだった」「いかがでしたか」各1例である。
- ⁷ 「どうです／でした（か）」型質問と一続きのものとしてYes/No 質問が「どうです／でした（か）」型質問の前に発せられている例は見られなかった。なお、「どうです／でした（か）」型質問の後にYes/No 型質問が続けて発せられる例が多かったと記したが、本稿で取り扱った例数は少ないので、その中で見られる例数の多さは絶対的な意義を持つものとは言えない。今後さらに多くの例を検討していきたい。
- ⁸ 以下の対話例において、LとIがインタビュアーで、その他はインタビュイーである。また、女性話者はアルファベットの大文字、男性話者は小文字で表記されている。複数の対話例に同一話者が登場する場合には、同じアルファベットで表記されている。用いているアノテーション記号は、本稿末尾に一覧を載せているが、基本的には西阪仰氏（明治学院大学）によるもの（<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm>）に依拠している。
- ⁹ transition relevant place の訳で、話者交替が起こりえる箇所のことである。
- ¹⁰ 会話分析では、「指向する」とは「注意を向けている」ことを指す。
- ¹¹ 「どう」を用いた質問に何らかの要素を付加することによって応答内容が限定されるという点については、増田・森本（2006）でも論じている。
- ¹² （4）のように「～と思うんですが」という形の他に、「（あなたが）～ように見えました」という形を用いて質問者の想定を提示している例もあった。
- ¹³ これらの2種類の付加要素がどちらも「普段対話の分析をしている者」としての立場と「今日対話に参加した者」としての立場の対比という一点に指向しているという可能性はある。その可能性については今後さらなる検討が必要であるが、本稿では応答内容の限定に性質の異なる2種類（想定と事実）の付加要素が用いられているということ指摘したい。
- ¹⁴ 先行する連鎖を通じて応答内容を限定することができず、応答に際して応答の遅延などのトラブルが生じる場合もある。このような例については増田・森本（2006）を参照されたい。
- ¹⁵ 7行目から12行目にかけてgが応答をやり直す過程を見ると、CSJ録音の際に話した内容について話すことが適切な形の応答であるとgが考えていることが読み取れる。CSJ録音の際に話した内容について話すことは、CSJ録音の話し手としての立場に直接関係する内容の応答であるので、このようなgの考えは、3行目で言及された質問者Iによ

る応答内容の限定に指向したためであると捉えられる。また、(8)では質問者Iが17、19行目でgの最初の応答(7行目)に沿った形で「え：っとじゃあ(0.4)>久しぶりに<国研に来てどうでしたか」という風に質問の仕方を変えている点も興味深い。これらの現象は、対話の参加者が互いに相手の望む応答内容に指向し、それに応じて自らの発話をデザインするという相互行為の様相を明確に示している。